



東北の思いで

川崎地質(株) 北関東支店

黒田 進

関東で生まれ育った私が初めて東北の地に足を踏み入れたのは、入社した昭和42年9月干拓が完了したばかりの八郎潟でした。

八郎潟は日本で初めての大規模機械化農業を目ざしていましたので、超軟弱地盤を農業機械が入れる程度まで強度を増加させる必要があり、そのための調査・試験が行なわれていました。今ではめったにお目にかかれない、フォイルサンプラーによる連続5m以上の不攪乱試料採取、ダッチコーン、ベーンテスト等による強度測定は地質屋、それも古い時代を専攻した地質屋にとっては、初めての体験であり、戸惑うことばかりでした。(なにせ、沖積層は粘土だろうが砂であろうが関係ありませんでしたので)

その後も東京支店勤務でありながら、東北での仕事が多く、山形県尾花沢市における新鶴子ダム調査では雪の中の弾性波探査、小国町のトンネル調査でも吹雪の中での弾性波探査、昼夜でのボーリング調査、岩手県野田における三陸縦貫鉄道の調査では、全面結氷した安家川で氷の上に足場を組んでのボーリング調査等、なぜか冬期に東北の地を訪れることばかりであったような気がします。

そんなこともあって、初めての転勤が仙台事務所(現在の東北支店)で昭和48年12月、小雪降るなか仙台の駅に降り立った時は、また、寒い中で仕事をしなければならないかと、ちょっと憂鬱になったことを覚えています。

しかしながら、いざ勤務してみると、仙台の地は冬期も比較的暖かく、夏は涼しく、また、人情も豊かで生活しやすく腰を落ち着けて勤務するつ

もりでいました。しかし、オイルショックによる不景気や会社の都合により僅か4年弱の勤務で仙台の地を離れることとなりました。その後、転勤癖が着き転々とし、平成元年より二度目の仙台勤務になり、約10年間の勤務となりました。一事務所での勤務としては一番長い地となっています。また、出張での勤務を含めると社会人生活の半分以上を東北の地で過ごしたことになります。

この10年間は単に仕事のみでなく、応用地質学会、東北地質業協会と関わったおかげで同業他社の多くの人と業務以外で交流ができたことは大きな財産となることと思います。特に、僅かな期間でしたが広報委員会で「大地」の編集に携わったおかげで、投稿された原稿を読むことにより若い人の考えを少しでも理解する機会がもてたことを感謝します。

《プロフィール》

- 昭和16年 東京生まれ、戦争により埼玉に疎開し、埼玉育ち
- 昭和42年 千葉大学文理学部地学科卒(微化石専攻)
- 昭和42年 川崎地質株式会社入社
- 昭和48年 川崎地質仙台事務所
- 昭和52年 川崎地質岡山事務所
- 昭和58年 川崎地質東京支店
埼玉事務所兼任
- 昭和62年～昭和64年 インドネシア
- 平成元年 川崎地質東北支店
- 平成4年 川崎地質札幌事務所兼任
- 平成10年 川崎地質北関東支店
現在に至る